

かいじん二十めんそう

江戸川乱歩

青空文庫

1

あるおひるすぎのことです。

東京のまつなみ小学校のこうていで、みんながあそんでいました。

休み時間なので、一年生から六年生まで、かけまわったり、キャッチボールをしたり、きかいたいそうをしたりして、あそんでいたのです。

「あつ、ヘリコプターだっ」

だれかがさけびました。

「ほんとだ。ヘリコプターだ」

口々にさけびながら、みんな空を見上げました。

よくはれたまつさおな空に、ヘリコプターが小さくうかんでいました。高くとんでいるので、のっている人のすがたは見えません。

「あつ、びらだよ。びらをまいたよ」

また、さけび声がわきあがりました。

おお、ごらんなさい。ヘリコプターから、さあつと、こなのようなものがふき出したかと思うと、それが、きらきらとかがやきながら、ゆっくりおちてくるのです。

おちるにつれて、こなのようなものが、すこしずつ大きくなり、それが、空いちめんにひろがってきました。

「きれいだねえ。金色に光っているよ」

ほんとうに、そのひとつびとつが、金色に光っていました。

紙のびらではありません。なんだかへんなものです。

「あらっ、あれ、おめんだわ。金色のおめんよ」

女の子がさけびました。

そうです。それは、おもちゃやでうっている、セルロイドのおめんのようなかたちをしていました。

何百という金色のおめんが、空からふってくるのです。ちかちか、きらきらそのうつくしいこと。子どもたちは、こんなうつくしいけしきを見たことがありますでした。

しばらくすると、そのたくさんのおめんが、こうていのあちこちにおちてきました。

みんなは、「わあっ」と、その方へかけ出し、あらそって、金色のおめんをひろいまし

た。

その日、学校がおわると、おなじほうがくへかえる子ども七人が、一かたまりになって歩いていました。

みんな、金色のおめんをかぶっています。あるとき、おめんは、百いじょうもこういへおちたのです。みんなが、おめんをもっている、ふしぎはありません。

それは、セルロイドを金色にぬったおめんでした。

金色にぴかぴか光ったかおが、にやりとわらっているのです。くちびるのりょうはしが、きゅつと上へ上がった、三日^{みかづき}月がたの口です。

「きみたち、そのおめんは、なんだか知ってるかね」

とつぜん、うしろで、声がありました。ふりむくと、せびろをきたおとなの人が、やつぱり、金色のおめんをかぶって立っているのです。

「あつ、すぎ山^{やま}先生だよ」

だれかがいいました。うけもちの先生ではないので、よくわかりませんが、なんとなく、すぎ山先生ににっています。

「このおめんは、なんだか知っているかね」

すぎ山先生らしい人は、またたずねました。

「知りません。どうして、こんなものをまいたのでしょうか」

五年生の石村^{いしむら}たかしくんがいました。

「おうごんかめんだよ」

「えっ、おうごんかめんって……」

「きみたちは知らないかね。金色のおをしたおうごんかめんという大どろぼうだよ」

「あつ、あのおうごんかめん。でも、なぜ、こんなおめんをばらまくのでしょうか」

「それは、おうごんかめんが、このへんにあらわれるぞという前ぶれだよ。あいつは、そんなことをするのが大すきだからね」

すぎ山先生らしい人は、そういつて、おかしそうにわらいました。

「この中に、石村たかしくんはいるかね」

「はい、います。ぼくです」

「それから、きみのいもうとのミチ子^こちゃんは」

「ええ、いるわ。あたし、ミチ子よ」

ミチ子ちゃんは、二年生のかわいい子でした。

「そのふたりに、ちよつとようじがあるんだよ。さあ、こつちへおいで」

すぎ山先生らしい人は、ふたりの手をとつて、よこ町にまがりました。ちよう

そこは、むかしからあるおみやで、ふかい森にかこまれた、ひるでも、うすぐらいところです。たかしくんとミチ子ちゃんは、なんだか、きみがわるくなってきました。

大きな木の立ちならんだうすぐらいところへ来ると、とつぜん、すぎ山先生のすがたが見えなくなつてしまいました。

ふたりの手をはなして、大きな木のむこうがわへ行つたかと思うと、そのまま、きえてしまつたのです。

きようだいは、あちこちと、さがしまわりましたが、どこにも、先生のすがたはありません。

しかたがないから、かえろうとすると、「えへへへ……」という、きみのわるいわらい声がして、大きな木のみきのうしろから、からだじゅう金色にかがやくかいぶつが、すがたをあらわしました。

あつ、おうごんかめんです。

すぎ山先生が、いつの間にか、おうごんかめんのすがたにかわつて、ふたりの前にあら

われたのです。

2

石村たかくんと、いもうとで二年生のミチ子ちゃんは、すぎ山先生だと思っていた人に、古いおみやの森の中につれこまれました。

ところがそのひとは、おそろしいおうごんかめんだったのです。

おうごんかめんこそ、人々からこわがられていたかいじん二十めんそうなのです。

「わつははは。どうだ、おれがなにものかわかっただろうな。いや、なにも、こわがることはない。きみたちならんぼうなことはない。ただ、きみたちのおとうさんのもっている、りっぱなえがほしいのだ。あしたの夜、ちようだいに上がると、おとうさんによくいつておくのだよ。わかったね」

そういったかと思うと、二十めんそうは、ぱつと森の中からかけ出してきました。

そして、すこしたつと、とおくから、じどうしゃの走り出す音がきこえました。きつと、おみやの外にじどうしゃをまたせておいたのでしょうか。

たかしくんとミチ子ちゃんは、いそいで家にかえり、おとうさんにこのことを話しました。

石村くんのおとうさんは、えがすきで、りっぱなえをたくさんあつめていました。

二十めんそうは、それをぬすみに来るといのです。

石村さんは、すぐ、名^{めい}たんていのあけち先生にでんわをかけました。けれども、あけちたんていはるすで、少年名たんていの小林^{こばやし}くんがやって来るようになりました。

小林くんは、少年たんていだんのだんちようです。

だんいん六人と、それからけいしちようの中^{なかむら}村けいぶに話をして、けいじ六人をつれ、あくる日のひるごろ、石村さんの家にやって来ました。

六人のけいじと、六人の少年たちは、手分けをして、へやの入口や、まわりのにわで見はりばんをしました。

ひる間はなにごともなく、夜になりました。

小林くんは、へやの入口のろうかのいすにかけて、がんばっています。

へやの外のくらいにわには、けいじたちがまどとへいの間を行ったり来たりしていました。

みんな、手にまるいぼうのようなものをもって、いそぎ足で歩いています。つぎの日の朝になると、石村さんが、小林くんのところへやって来ました。

「あつ、石村さん、なにごとありませんでした。へやをしらべてください。二十めんそうは、ぼくたちをおそれて、とうとうぬすみ出せなかったのです」

小林くんがそうだったので、石村さんはへやの中をしらべましたが、えは一つもなくなっています。

そこで小林くんたちはかえっていききました。

みんなのかえってしまったあとで、石村さんのところへおかしなでんわがかかってきました。

「きみは石村さんかね。ははは、とうとうだまされたね」

「えっ、なんだって。きみはいつたいだれだ」

石村さんは、びっくりしてききかえました。

「はっははは、わかりませんか。こんなでんわをかけるのは、あいつにきまっているじゃないませんか」

「えっ、あいつだって。それじゃ、きみは二十めんそうだな」

「そうだよ、おきのどくさま。きみのたいせつにしているえは、みんなちようだいしたよ」
「えっ、ちようだいしたって。わたしのへやのえは、一つもなくなっていないよ。ははは」
「ははは、きみの目もあてにならないね。あれは、みんなにせものだよ。」

小林もにせもの。少年だんいんやけいじもにせもの。みんな、おれの子分こぶんだったのだ。
夜中に、本もののえをはずして、にせものとはめかえて、本もののほうをもち出してしまったのさ」

「えっ、あれがみんなにせものだった」

石村さんは、びっくりして、へやへとんで行って、ひとつびとつよくしらべました。

「あつ、やつぱりそうだ。本ものとそっくりにかいてあるが、みんなにせものだ」

石村さんは、まっさおになつていいました。

それにしても、小林くんまでにせものとは、いったいどんなやり方かたをしたのでしょうか。

3

二十めんそうは、石村さんのえを、ぜんぶにせものとりかえて、ぬすんでいつてしま

いました。

そこにいた六人のけいじと、小林くんと少年たんでいさん六人がまもっていたのですが、それが、みんな、二十めんそうの子分のへんそうしたにせものだったのです。

ほんとうにおどろきました。

どろぼうたちにばんをさせたのですから、ぬすまれるのはあたりまえです。

小林くんまでにせものだったのです。

では、本ものの小林くんは、どうしたのでしょうか。小林くんは、二十めんそうのために、ひどいめにあっていたのです。

石村さんは、この話のはじめに、小林くんにでんわをかけましたね。

そのでんわを、石村さんの家にしのびこんでいた、二十めんそうの子分がきいてしまったのです。

小林くんは、石村さんからでんわがあると、くわしい話をきくために、じどうしやをよびました。

小林くんが、じどうしやにのろうとしたとき、うしろから、ひとりの男がのってききました。

その男は、小林くんをたおして、さるぐつわをはめ、手足をしばってしまいました。この男とうんてん手は、二十めんそうの子分だったのです。

こうして、小林くんは、つれていかれたのでした。

そして、じどうしやがとまったところは、はらっぱの中の、おかしな家の前でした。

そこは、おばけやしきの見せもの小^ごやです。

その中には、きみのわるいゆうれいや、おもしろいおばけや、いろいろなものばかりがならんでいるのです。

手足をしばられた小林くんは、ふたりのわるものにだきかかえられて、おばけやしきのおくの方へつれこまれました。

竹やぶの中のはそい道をすすんでいきました。

すると、とつぜん、すごいかいぶつがあらわれました。

大きさは、二メートルもあり、くびが、じめんからゆうと出ているのです。

それは、ゴリラのようでもあり、ライオンのようでもあり、人間のわるもののようにもありません。

それは、大きな、おそろしいかおでした。

ふたりのわるものは、ぼうぼうと、草のはえたじめんに、小林くんをほうり出しました。すると、竹やぶの中から、おうごんかめんをつけた二十めんそうが、ぬうつとあらわれまし。

「わっはははは……、小林か、しばらくだったなあ。きみをこうしておいて、石村のえを、ぜんぶちようだいすることにしたよ」

小林くんは、くやしいけれども、しばらくしているので、なにもできません。

「今ごろは、きみとそっくりな少年と、少年たんでいだんいんが六人、けいじが六人、石村の家をまもっているわけだ。」

それがみんなにせもので、おれの子分というわけだ。

わっはははは。

二十めんそうのちえは、こんなもんだ。

あけちが東京にいないのが、ざんねんだよ」

といいまし。

「おれは、あけちのにせものだって、ちゃんと作るからね。

ところで、きみは、すこし、このかいぶつの中で、おとなしくしているんだ。」

このおばけやしきは、じつはおれのものなのでね。

めずらしいものがたくさんあるよ。きみにも、あとで見せてやるよ。はっははは」

ああ、大どろぼうが、おばけやしきをもっているなんて。

かいぶつのうしろにまわると、ちよつと見たのではわからない入口がついていました。ふたりの子分は、それをあけ、中に小林くんをほうりこんでしまいました。

これから、ポケット小^こぞうが小林くんを見つけるのです。

そして、二十めんそうとのおそろしいたたかいがはじまるのです。

4

小ばやしくんが、おばけやしきのかいぶつのくびの中にとじこめられたのと、おなじ日のことです。

しょうねんたんでいだんいのポケット小ぞうは、なんにもしらなくて、おばけやしきのちかくをあるいていました。

すると、むこうからだんいの^{うえ}のうくんがやってきました。

「あつ、ポケット小ぞうじやあないか」

「あつ、いの上さん。なんで、そんなにいそいでいるの」

「うん、たいへんなことがあるんだ。さつきむこうで、ビーディーバッジをひろったんだ。うらを見ると、ローマジで小ばやしとほつてある。だんちようのバッジにちがいない。それが、三メートルおきぐらいに、いくつもおちているんだ」

「じゃあ、小ばやしさんが、だれかにさらわれたんだね」

「うん、ぼくが、このバッジのあとをつけていくと、おばけやしきのみせもの小やのまえにでたんだ。小ばやしだんちようは、あのおばけやしきにつれこまれたにちがいない。

それで、いそいであけち先生のところへしらせようとおもって、でんわをさがしていたんだよ」

「だめだよ。あけち先生は、大さかのほうへいって、るすだよ」
おお

「それじゃ、しかたがない。このちかくにいるだんいんの木きのした下くんをよんで、三人でおばけやしきにはいつてみよう。小ばやしだんちようをさがすんだ」

ふたりは、ちかくのおみせの赤でんわで、木下くんをよびました。

木下くんは、すぐにやってきました。

「木下くんは、でんわのあるだんいん五、六人にでんわをして、あとから、おばけやしきへきてくれたまえ。」

だが、中へはいらないで、どこかにかくれているんだ。

そして、もし、中からふえのおとがきこえたら、ぼくたちをたすけにくるんだ。いいかい」

いの上くとポケット小ぞうは、木下くんをのこして、おばけやしきの中へはいりました。

まだ、じこくがはやいので、けんぶつの人はあまりいません。

うすぐらいおばけやしきは、しんとして、おはかのようにしずかです。

こわごわあるいていくと、せびろをきてぼうしをかぶった、六つぐらいの子どもがとびだしてきたのです。

「いらつしやい。こちらへおいでください」

なんだか、レコードでもきいているようなこえでした。

その子どもは、はぐるまのようなおとをさせて、先にあるいていくのです。

「この子どもは、きつと、ロボットだよ」

いの上くんは、そういつて子どものかおをゆびでたたいてみました。すると、コツコツとおとがしました。

ロボットなのです。

そのロボットについていくと、まっくらなまくでかこまれたへやにはいました。

「あつ、がいこつだ」

ふわつと、一つのがいこつがあらわれて、コツコツと、ほねのおとをさせながらおどりました。

すると、また、もう一つもう一つと、つぎつぎにがいこつがあらわれて五つにふえてしまいました。

そして、いの上くとポケット小ぞうのまわりを、ぐるぐるとおどりながらまわるのでした。

それは、ほんとうのがいこつではありません。つくったものなのです。でも、まっくらなところで、こんなものであったら、だれだって、きみがわるくなります。

さあ、これからどんなことがおこるでしょうか。

ふたりは、うまく小ばやしくんをたすけることができるでしょうか。

5

おばけやしきへつれこまれた小ばやしくんをたすけるためにポケット小ぞうといのうくんが、おばけやしきへはいつていきました。

そこには、しょうねんたんでいだんいんが、あいずのあるのをまっているのです。

小さな、子どものロボットが、ふたりを、がいこつのへやへつれていきました。

がいこつが、カタカタおどっているのです。

はじめはびっくりしましたが、そのがいこつは、あやつりにんぎょうと同じだとわかったので、ふたりは、わらっておくへすすんでいきました。

子どものロボットは、もう、ついてきません。

たけやぶのうすぐらいみちをとおつていくと、すうつと、ふたりのあたまの上に、おばけがとびついてきました。

それも、にんぎょうだとわかったので、こわくありません。

おくへすすんでいくと、いろいろなおばけがでてきましたが、ふたりは、へいきです。

どんどんすすんでいくと、大きないぶつのくびがたけやぶの中から、にゆうつとあらわれしました。

大きさは、二メートルもある、ゴリラとライオンをまぜあわせたような、大きなおぼけです。

ふたりが、おもわずたちどまってみると、そのくびが、カタカタとうごいているのにきがつきました。

「おや、へんだな。もしかしたら、この中に……」

そうおもったときです。

「わつははは」というわらいごえがして、たけやぶの中から、ぴかぴかと金いろにひかるものがあらわれました。おうごんかめんです。

「きさまたち、おれが、ビーディーバツジをみちにばらまいておいたのにだまされて、やってきたな。まっていたぞ。」

さあ、いいものをみせてやる。こっちへくるんだ」

二十めんそうのおうごんかめんは、そういったかとおもうと、いの上くんにとびかかってだきかかえてしまいました。

そして、ポケット小ぞうをつかまえようとしたが、小ぞうは、すばやくたけやぶの中へにげました。

二十めんそうは、^{てした}手下をよんで、いの上くんをわたすと、ポケット小ぞうをおいかけました。

たけやぶをさがしましたが、なかなかみつかりません。
ポケット小ぞうは、りすのようにすばしっこいのです。

二十めんそうは、まごまごあるきまわっていました。

ひよつとみると……。

むこうに、小さなやつがたっているのに、きがつきました。

そばへいつてみると、それは、子どものロボットでした。

「いらつしやい。こちらへおいでください」

ロボットは、それしかいえないのです。二十めんそうは、ちえつとしたうちして、いつてしまいました。

すると、ロボットがにやつとわらったのです。

それは、ポケット小ぞうがばけていたのです。

二十めんそうがいつてしまったので、ポケット小ぞうは、かいぶつのくびのところへいそぎました。うしろへまわつてみると、ドアがあり、ひらいてみると、手足をしばられた小ばやしくんが、中にたおれています。

ポケット小ぞうは、小ばやしくんのなわをといて、ふたりで、たけやぶのおくへにげました。

すると、そこには、ひろいうかのようなところがあつて、まどがついていました。ポケット小ぞうは、まどをひらいて、あいずのふえをふこうとしました。

そとにいるだんいんにしらせるためです。

小ばやしくんは、いそいでそれをとめました。

「ぼくたちだけではあぶない。ぼくがそとへでて、中むらけいぶにでんわをかけてくる。それまで、きみはかくれていたまえ」

そういつて、小ばやしくんは、そとへとびだしていきました。さあ、二十めんそうは、つかまるでしょうか。

小ばやしくんは、けいさつのたすけをたのむために、おばけやしきをぬけだしていきました。あとにのこったポケット小ぞうは、ロボットにばけたまま、また、たけやぶの中へもどり、二十めんそうをさがしました。

「あつ、いる、いる」

おうごんかめんにばけた二十めんそうが、おばけやしきのおくへあるいていくのがみえます。

ポケット小ぞうは、そつとあとをつけました。しばらくすると、みちはいきどまりになりました。

まわりが、コンクリートのかべでかこまれているのです。

二十めんそうは、そのいきどまりのみににはいったかとおもうと、ぱっときえてしまいました。

にんじゆつをつかったのでしょうか。

いや、そんなはずはありません。

ポケット小ぞうは、そこにはいつて、中のかべをしらべました。そして、かべをあつち

こつちなでまわしていると、コンクリートの上に、ぽつんとでっぱったところがあり、それがぐらぐらうごくのです。

ために、ぐつとおしてみました。

すると、目のまえのゆかがさつとひらいて、四かくなあながでてきたではありませんか。ちかしつへのいり口です。

二十めんそうは、ここからおりていつてしまったので、きえたようにみえたのです。ポケット小ぞうは、あなの中へおりようとしたが、ふときがついて、ビーディーバツジをみちにばらまきました。そして、あなのふたをひらいたまま、ちかしつへおりていきました。

かいだんをおりると、ドアがあります。

そつとひらいて、中をのぞきました。

「あつ」

おばけです。うじやうじや、おばけがならんでいるのです。一つ目小ぞう・三つ目小ぞう、一本足の太にゆうどうや、そのほか、たくさんのおうれいやおばけでいっぱいです。おどろきましたが、よくみると、みんなにんぎょうです。

おばけのあいだから、へやのおくをみると、大きな木はこのまえに、二十めんそうがたっていました。

木のはこをあけて、中から、ほそながくまいたえをだして、みているのです。

「あつ、わかった。

あれは、石むらさんのいえからぬすみだした、だいじなえだつ」

えは、みんなまいて、あのはこの中にしまつてあるのにちがいない。

ポケット小ぞうは、それをみつけたうれしさに、ゆだんをして、へやの中へはいろいろとしましたので、おばけがガタンとたおれました。

大いそぎでにげしましたが、二十めんそうはきがついて、おいかけてきました。

そして、かいだんのとちゆうでつかまつてしまいました。

ポケット小ぞうは、その手をはらいのけて、ちかしつへにげこみ、おばけのにんぎょうをかたつぱしからたおして、おかしなおにごっこをはじめました。

でも、とてもかかないません。二十めんそうのために、とうとうおさえつけられてしまいました。

「きさま、ポケット小ぞうだな。こうしてやる」

二十めんそうのてつのようなゆびが、くびにぐいぐいとくいこんでできます。いきがつまって、いまにもしにそうです。

そのときです、ビーディーバツジのききめがあらわれました。小ばやしくと、五人のだんいんと、五人のおまわりさんが、とびこんできたのです。さすがの二十めんそうも、こんなにおおぜいにとりかこまれては、もう、どうすることもできません。とうとう、手じようをはめられてしまいました。

それから、おばけやしきにいた手下も、みんなつかまってしまい、石むらさんのだいじなえも、ぶじにもどりました。

「ポケットくん、こんども、きみのおてがらだったね」
小ばやしくんが、ポケット小ぞうをほめました。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第21巻 ふしぎな人」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年3月20日初版1刷発行

底本の親本：「たのしい二年生」講談社

1959（昭和34）年10月～1960（昭和35）年3月

初出：「たのしい二年生」講談社

1959（昭和34）年10月～1960（昭和35）年3月

※底本は、連載の回数を見出しとしています。

入力：sogo

校正：北川松生

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かいじん二十めんそう

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>